津久見市の小児医療・小児保健の向上を目指して

こどもの病気対策法⑫⑧

ーおたふくかぜー

大分大学客員教授　是　松　聖　悟

古くからよく聞く感染症です。多くの大人が罹ったことがあることでしょう。大人になって罹ると子どもが産めなくなると聞くので、子どものうちに罹ったほうが良いとの誤解をしている人も多いようですが、それは間違いです。

おたふくかぜはムンプスウイルスの感染です。2-3週間の潜伏期の後、頬が腫れて数日痛み、1週間程度で回復します。罹ったヒトの唾液中には、頬が腫れる1週間前からウイルスが排出されているので、発症してから隔離しても完全に流行を防ぐことはできません。

罹った場合、10-100人に1人は髄膜炎に、1,000人に1人は難聴になります。他にも膵臓炎、精巣炎、卵巣炎などの合併症があります。妊婦が感染すると流産の危険が高まります。合併症のうち、髄膜炎などは治りますが、難聴は生涯治りません。日本耳鼻咽喉科学会の調査では、2015～2016年の2年間に少なくとも348人が難聴になったと報告されています。

一方、成人男性が罹った場合、精子が一時的に減少することはありますが不妊症になることはほとんどありえません。ですから、子どものうちに、わざとおたふくかぜに罹った子どもと接触させたりはしないでください。

治療薬はありませんので、唯一の予防法はワクチンです。発症者は1回のワクチンで88%、2回のワクチンで99%減少することがわかっています。副反応として40,000回に1回の頻度で髄膜炎が報告されていますが、前述した自然に罹ったときの髄膜炎の頻度より遥かに低い頻度です。おたふくかぜワクチンは任意予防接種ですので通常は有料ですが、津久見市独自の公費助成があります。津久見で子育てするメリットを感じてください。

おたふくかぜの5つのポイント

- 頬が腫れて痛い症状が数日続く。
- 頬が腫れる前からヒトに感染させる。
- 治療薬はない。
- 罹ったら、10-100人に1人は髄膜炎に、1,000人に1人は難聴になる。
- 2回の予防接種で発症を防げ、津久見市では公費助成されている。